

北海道情報大学 公開セミナー（2017・5・20）

ミステリー×札幌 アンケート回答

札幌ミステリーに関するQ&A

Q1 ミステリーの「聖地巡礼」でやりごたえがあるだろうと思うものや、実際に行ったことがあるものがあればそのお話を聞きたいです（札幌に限らず）

諸岡◆やりごたえがあると思ったのは佐々木譲『笑う警官』です。地名が本当に詳細に出ていて、移動ルートも特定できるので、その通りに動いてみたいです。実際に行ったことがあるのは、乾ルカ『メグル』です。北海道大学を散歩すればほぼコンプリートできます。

大森◆聖地巡礼の定義と一致しないのですが、鮎川哲也先生がご存命だったときに北広島のご実家を訪問できたこと（夏は北広島、冬は鎌倉でお過ごしなさっていた）、昨年（2016年）、札幌の高城高邸を訪問したことは、かなりうれしい思い出です。

Q2 戦前の札幌を舞台にしたミステリーはあるでしょうか。

諸岡◆管見の限りではありませんでした。戦前は小樽や函館の方が有名で、札幌は官公庁の街というイメージが強かったことが影響しているのかもしれませんが。やはり、1972年の札幌オリンピック以前と以後で、札幌のイメージが大きく変わったように感じています。

大森◆小樽（山田正紀『人喰いの時代』）、函館（高城高『函館水上警察』）ならありますが、戦前の札幌は街としてキャラが立っておらず、作家の想像力をあまり刺激しなかったようです。近年だと乾ルカ『ミツハの一族』が明治の札幌を舞台にした作品ですが、ホラー寄りのミステリーという印象でした。札幌農学校に赴任した有島武郎が探偵役のミステリーなど、読んでみたいです。

Q3 ミステリーで札幌が一番ひどい目に遭っているのはどんなことですか？ 反対に、札幌がよい目に遭っていることはありますか？

諸岡◆ひどい目に遭っているのはやはり安生正『生存者ゼロ』ではないでしょうか。よい目に遭っているのは……札幌ではないですが、西村京太郎『札幌線の愛と死』では、新十津川町がある意味でよい目にあっている……気がします。

大森◆イベントで紹介されていた安生正『生存者ゼロ』がいちばん「ひどい目」の例だと思います。小路幸也『札幌アンダーソング』もなかなかひどいような……。ミステリーにおいてはそもそも事件現場として街が選ばれるわけで、「よい目」というのは難しいですね。よそからやってきた探偵役たちは市内観光、グルメ、とよい思いをしているようです。

Q 4 札幌にゆかりのある作家とない作家で、札幌を小説の舞台にしたとき、何かその舞台の扱い方で、違いはありませんか？ もしありましたらどんな違いがあるのか教えてほしいです。

諸岡◆作品に登場する地名として、札幌にゆかりのある作家の作品では、札幌駅から北の地名が比較的好く出てきます。一方、札幌以外の作家の作品ではほとんどが南側の地名です。観光地として有名なスポットがどこにあるかというのと関係しているのではないかと思います。

大森◆札幌にゆかりのある作家（住んでいた／住んでいる）は、雪や冬に幻想がなく、現実的に書いている印象を受けます。また浅い歴史の闇の部分にも想像力が働くように思います。組織暴力団のススキノ進出や悪徳警官、バブル崩壊後の不良債権問題……。東直己はススキノはじめ繁華街の描写がリアルですね。具体的な番地入りで描かれた雑居ビルなどはほんとうに存在しているようです。高城高はそもそも現実の店、ひと、出来事をモデルにして『夜明け遠き街よ』のシリーズを書いていました。

ゆかりのない作家の場合、観光客目線になったり、異常な出来事が発生する「異界」のように扱われたりする印象です。ただし以上は、あくまで傾向。ゆかりのない作家・内田康夫『札幌殺人事件』はディテールが細かく、取材力に定評があることに納得しました。

Q 5 札幌を舞台にした本格派のミステリー小説はありますか？

諸岡◆柄刀一『密室キングダム』『レイニー・レイニー・ブルー』『翼のある依頼人』、佐野洋『一本の鉛』、平石貴樹『スノーバウンド』などがあります。

大森◆柄刀一でしょう！ それ以外だと、イベントで紹介した『雪の断章』（佐々木丸美）、『スノーバウンド@札幌連続殺人』（平石貴樹）。『奇想、天を動かす』（島田荘司）も外せない。『人外境の殺人』（早見江堂）では「札幌市藍の木（モデルは「あいの里」か?）」の紫の館で生じる殺人事件を扱っています。ただし、3部作の最終作なので、第1部、第2部のネタバレをやや含みます。

ミステリー全般に関するQ & A

Q 6 大学でミステリーを教えているとは知りませんでした。受講学生はどのくらいいますか？ どのようなことを学べますか？

諸岡◆北海道情報大学の共通教育科目である「文学Ⅰ」および「文学Ⅱ」ではミステリーを題材に講義を展開しています。2017年度の受講生は両科目とも約200名です。通信教育課程にも「ミステリーを読む」という科目があります。講義の主な目的は、日本のミステリーを知ること、ミステリーを通して基礎的な文学理論を知ることです。ミステリーは読者を楽しませるために様々な文章上のテクニックを使っていますから、文学理論の基礎を学ぶにはうってつけのジャンルであると考えています。また、学生にとって身近なジャンルを取り上げることで、少しでも文学に興味を感じてもらいたいというねらいもあります。

Q 7 作家の先生方に質問です。古今東西ミステリーが多く発表されている中、似た作品、同じようなトリックを使った作品もあると思いますが、読者にすでに読んだことがあると思わせないように作品を作るとき何か工夫をしていることがあればおしえてください。

大森◆わたしの場合、現実世界とリンクしているとはいえ、ファンタジー設定なので、存在しない「商品」「日常道具」「言葉づかい」などで工夫しています。ファンタジーはそもそも「世界を作れる＝表現を作れる」ので、もっと可能性のあるジャンルだと思っています（ミステリーでも一般文芸でも）。

Q 8 みなさんにとって密室とはどのようなものですか？

諸岡◆ミステリーの醍醐味が凝縮されたシチュエーションだと思います。密室と聞くと無条件にテンションが上がります。

大森◆わたしにとって「密室」は、空間を自在にコントロールしたいという人類の夢のひとつの表出です。アリバイは時間のコントロール。SFでこれは、スペースシップとタイムマシンになる（あるいはテレポーテーションや未来予知）と考えています。

Q 9 取材はどうされているのですか？

大森◆わたしの場合はファンタジーが基本なので、ひとと会ったり話を聞いたりする取材

はあまりありません（それもどうかと思う）。しかし、洋館のイメージには、旧道庁赤レンガや西12丁目の札幌資料館をよく拝借しています。シャンデリアや階段、内装や調度、花壇や庭園をこっそり盗んでいます。

Q10 今まで読んだ中で最も面白かった短編本格ミステリーは？

諸岡◆麻耶雄嵩『メルカトルと美袋のための殺人』に入っている短編はどれも面白いです。それから同著者の『貴族探偵』に入っている「こうもり」という短編も好きです。最近の作品だと長岡弘樹『血縁』に収録されている「オンブタイ」が印象に残っています。

大森◆短編ではロバート・バー「放心家組合」なのですが、これは一般に「奇妙な味」の作品に分類され、本格とみなされていないんですよ。んー。江戸川乱歩編『世界短編傑作集1』（創元推理文庫）で読めます。同じく『世界短編傑作選5』に入っているベン・ヘクト「十五人の殺人者たち」も好きです。しかし、これも本格とは呼ばれてない……。

日本だと鮎川哲也の「達也が嗤う」が好きです。また、子どものころにテレビで観て仰天した密室トリック——横溝正史「本陣殺人事件」。動機には首を傾げましたが。麻耶雄嵩『メルカトルかく語りき』という短編集はどの作品もツボ。

Q11 今まで読んだ中で最も面白かったホワイダニットの本格ミステリーは？

諸岡◆すぐに思いつくのは、鳥飼否宇『死と砂時計』、オーソン・スコット・カード『死者の代弁者』（SFです）などです。

大森◆ホワイダニットで印象に残っているのは、中井英夫『虚無への供物』、アントニイ・バークリー『試行錯誤』ですね。比較的最近なら、天祢涼『キョウカンカク』です。

Q12 倒叙は本格？

諸岡◆「誰が犯人か？」という謎はありませんが、「どこで犯人がミスをしたか？」「探偵はどこで気づいたのか？」といった謎を論理的に解明することができるので、本格だと思っています。

大森◆倒叙ミステリー、本格だと思っています。オースチン・フリーマンの昔から。「誰が犯人か最初から明らか」ですが、刑事コロンボの某作品（あえて伏す）では犯人が双子の兄弟でした。つまり視聴者にも、犯人が兄か弟か、わからないという。

Q12 ミステリーとサスペンスの違いは何ですか？

諸岡◆作品の要素として捉えた場合、ミステリーは謎が、サスペンスは宙づり状態のドキドキ感だと考えています。ジャンル名として捉えると、そのどちらの要素が強いかで、ミステリーといわれるかサスペンスと言われるかが変わってくるでしょう。ただし、ジャンルというのは重なることがあるので（ミステリーでありながらサスペンス、SFでありながらホラー……など）、両者を兼ね備えた作品等のも当然ありえると思います。

大森◆私見ですが、サスペンスとミステリーは「含む／含まれる」の関係です。サスペンスは冒険小説、SF、ミステリー、ホラー、一般文芸など、広く見つけることのできる要素です。一般にタイムリミット（間に合わない!）、スペースリミット（閉じ込められた!）ですが、「追い詰められた状況を設定し、話を引き伸ばす」と説明されます。「追い詰められた状況」とは一種の「限定」です。この「限定」にとらわれた主人公は、トラブルを解決するために余分な時間を捻出したり、脱出方法を探し出したりします。本格ミステリーに引き寄せて考えれば、前者がアリバイトリック、後者が密室トリックになるのです（ミステリーの場合、それを探するのは探偵役です）。

ともかく「限定」的な「枠組み」を作ってやることです。「予言—成就」「別れ別れの恋人たち—再会」「経済的困窮—回復」「人質事件—人質解放」「誤解—理解」「謎—解決」。これらはすべてサスペンスと一般に呼ばませんが、物語のエンジンや加速装置として機能します。

「話のなかでピストルが登場したら、その引き金はどこかで引かれねばならない」とチェーホフはいったそうですが、こういう「枠組み」が読書中の読み手の興味を引きつけ、ページをめくらせることに役立つでしょう。「先の展開を早く知りたい」という読者の切迫感を作者／物語が積極的に利用するようになったのは、19世紀の後半から。蒸気機関車が走り、気球が飛び、電信が発明され、人類のスピード感覚がどんどん加速していくタイミングでした。

Q14 リスペクトしている作品を教えてください。

諸岡◆島田荘司『斜め屋敷の犯罪』、麻耶雄嵩『翼ある闇』は無条件でリスペクトしています。この作品と出会ったからいまの自分があるのだ、と思えるからです。

大森◆不思議な物語が好きなので、ミステリーは子どものころ、「人間しか出てこない!」と不満でした。超能力者、怪物、宇宙人、未来人、魔法使い……が出てこない「絵のない本なんてどこが面白いのか」（不思議の国のアリス）と思ったものです。しかし、90年代

になると状況がガラリと変わりました。なんといっても京極夏彦の妖怪ミステリー、西澤康彦のSF設定ミステリーには、「ようやく読みたいミステリーが出てきた!」と思いました。というわけで、『魍魎の匣』『人格転移の殺人』はリスペクトしています。影響も受けています。

ミステリー以外なら、ソルジェニーツィン『収容所群島』。零下50度のシベリアの強制収容所でいかに生きのびるか。作者も収監され、みごとサバイバルしたのですが、その工夫にはまったく脱帽です。監視が厳重な強制収容所から「自由に」脱出してみせるので、ミステリー好きにはちょっと面白い。「脱獄」するわけではなく、合法的に抜け出してみせるのです。激しくリスペクトしています。

Q15 本格ミステリーを書くとき、一番大事にしていることは何ですか？

大森◆長編本格ミステリーは冒頭で派手な謎を提示し、最後に解決するので、その間、どうやって間をもたせるか、悩みます。「手がかり」の提出のタイミング、「手がかり」の連鎖の断絶と接続の工夫が難しい。連続殺人だと走りながらガソリンを補給するかんじなのですが、破綻や矛盾が怖いです。なにより、プロットの段階でしっかりしたものにすることが大切なんだと思います。これは短編でもそうでしょうね。

Q16 これまで読んだ一番面白いミステリーは何ですか？

諸岡◆麻耶雄嵩『翼ある闇』です。ミステリーについての思い込みをこれでもかと裏切られました。名探偵ならぬ銘探偵メルカトル鮎の「活躍」ぶりも面白いです。何度読んでも楽しめます。

大森◆「一番」というのは難しい……。アントニイ・バークリー『最上階の殺人』はかなり面白かったです。警察小説なら『警察署長』(スチュアート・ウッズ)、心理サスペンスなら『ふくろうの叫び』(パトリシア・ハイスミス)、ひねった本格なら『火刑法廷』(ディクソン・カー)、ノワールなら『ブラック・ダリア』(ジェイムズ・エルロイ)、冒険小説は『深夜プラス1』(ギャビン・ライアル)。シリーズものは「貴族探偵ピーター・ウィムジー」(ドロシー・L・セイヤーズ)。日本で1作なら中井英夫『虚無への供物』。これは洞爺丸事故の経緯を知り、読み直してから評価が急上昇しました。もう1作つけ加えるなら、山口雅也『奇偶』。最近(?)は若手本格なら、森川智喜を注目しています。

Q17 生で見たいトリックは？

諸岡◆実際に実験された方がいるとのことなので、横溝正史『本陣殺人事件』のトリックは

ぜひ生で見たいです。

大森◆島田荘司『斜め屋敷の犯罪』『暗闇坂の人喰いの木』『水晶のピラミッド』『龍臥亭事件』——ともかく、あの大きかりなトリックを実物にしてほしい。あと、二階堂黎人『人狼城の恐怖』。実物大の人狼城をぜひセットで作ってほしい。「生」が無理なら、映像化でもいい。

Q18 ミステリーにハマったきっかけは？

諸岡◆高校時代、1時間ほど列車に乗って通学していたのですが、その際に島田荘司『斜め屋敷の犯罪』を読んで衝撃を受けたことです。その時の天気や景色などは、いまでもはっきりと覚えています。

大森◆子どものころに横溝正史『犬神家の一族』が角川で映画化され、種を植え付けられました。大野雄二の音楽にやられました。古谷一行が金田一耕介を演じた「横溝正史ドラマシリーズ」はリアルタイムで観ています。「まぼろしの人」をカラオケで歌えます。

しかし、「でも名探偵といたって、しょせん人間だよな。未来予知とかしないし」という態度で、そのころはわりとSFを読んでいました。安部公房『第四間氷期』など、基本はSFですが、ミステリー風味でたいへん面白かったです。アシモフ『銀河帝国の興亡』とか。

1作目に書いた拙作のファンタジーを「これ、SFですよ？」といわれることがあるのですが、このときの読書体験が反映されているんだと思います。

やがて同世代がミステリーを書くようになり「お、綾辻行人はホラー風のミステリーか！『霧越邸』面白そうだな」としだいに関心を寄せるようになって、京極夏彦が登場ですよ。あわせてディック・フランシスの『興奮』なども知人から薦められ、サスペンス構造について考えるようになったり、民俗学に興味があったので、御霊信仰で戦後の社会派ミステリーを読み、笠井潔の「大量死」理論と同じような結論にたどり着いたり。そこからへんから、ずぶずぶとミステリーの深みに足を踏み入れました。